

町のものづくり守れ

西日本豪雨3週間

ものづくりの灯は消さない。西日本豪雨による被害が深刻な倉敷市真備町地区に、製造部品の製造に欠かせない部品「中子」を手掛ける企業がある。町中心部の幹線道路沿いに本社工場を構える友成工業（同町箭田）。工場が水没し再開

倉敷・真備で被災「中子」製造再開へ 製造に必須部材



8日、友成工業提供
浸水した工場。一時は天井近くまで達したという

が危ぶまれたが、技術が必要とする全国の取引先が復旧をバックアップ。時には競合相手となる同業者も職人を受け入れ、機械を貸すなど、継続生産を支える。あの日から、27日で3週間。「日本の製造業ならではの連帯感に助けられた」。数野介人社長(35)は感謝を胸に、早期の工場再興を目指して汗を流す。

(太田知二)

取引先や同業者、復旧支援

今週初め、友成工業の本社工場。部品を取り出したり、資材を洗ったり、モーターの動きを確認したり。猛暑の中、作業着姿の男たちが行き交う。着ている服の会社名はまちまち。水害以来、東海や九州、中四国地方などから取引先や同業者ら

が、多い日で30人以上駆けつけ、作業を手伝う。「過酷な状況から立ち上がる勇氣を持てたのは、周囲の支えのおかげ」。数野社長がほほ笑む。

工場は一時、天井近くまで5ほほど浸水。水が引いた9日から片付けに取りかかったが、床には泥がこびりつき、資材も散乱。生産に使う20台近くの造形機や木型、金型といったあらゆる物が水に漬かった。「築いてきたものが全てなくなった。壊滅とほころい。こういうことか、と」。創業から十余年。1点から少量品や量産品まで幅広く仕事を請け負い、18人の社員で農業機械や

が、多い日で30人以上駆けつけ、作業を手伝う。「過酷な状況から立ち上がる勇氣を持てたのは、周囲の支えのおかげ」。数野社長がほほ笑む。

産業機械、自動車部品の加工に用いる3千種類以上の製品を提供するまでになったが、先が見えない状況に追い込まれた。苦悩の中で社員が発した「ここで再建しない」という言葉が心に残った。さらに取引先のポンプメーカー「お宅がなくなるとうちの仕事が成り立たない」と懇願されたことで、「求められている以上、やらなければ」と再開への決意が芽生えた。

加えて、苦境を知った数十社に及ぶ取引先から支援の申し出が相次いでくるなど、復興への確かな一歩を踏み出した。電気も復活し、近く操業を再開できる見通しも立った。



設備を前に話し合う数野社長(左)と松下社長。復旧に同業者も駆け付けている

「他社や取引先に手を差し伸べてもらえんとは思わなかった」という数野社長。「何年かかるかわからないが以前と同じ環境を取り戻し、受けた恩を地域や業界に返して人を4社が受け入れ、各いければ」と前を向く。

ズーム

中子 溶かした鉄を流し込み成型する鑄造の工程で使う部材。部品に空洞や穴を作ったり、厚さを調整したりするため鑄型にはめ込む。最終段階で崩すため、素材には特殊な砂が用いられる。複雑な形の部品を一体的に作るのに必要とされ、高い精度と耐久性が求められる。日本鑄物中子工業会(愛知県)の会員企業は友成工業を含め76社。